

東京多摩西部地区の高齢者の生活に関する総合的研究（第2報）衣生活
 都立立川短大 ○林隆子、川端博子、石川尚子、大久保みたみ、大関政康
 大竹美登利、唐沢恵子、斉藤浩子、高崎禎子、武田紀久子

目的 第1報のとおりであるが、特に第2報では高齢者の着衣実態ならびに就寝様式などについて調査し、それらの特色を把握する。

方法 衣生活に関する調査内容は、温熱感覚と調査当日の着衣の服種、形、構造、素材ならびに寝具の状況などである。

結果 調査当日の着衣はほとんど洋服で男子では0.3%、女子では約4%が和服であった。温熱感覚については若いときより厚着になったと答えた者が40%をこえるが、いずれも衣服量を適宜加減し半数以上が快適感を得ている。着衣の種類は、男子の場合、上半身には肌着シャツ、外衣シャツにジャケットかジャンパーを着用、下半身には、パンツ、ズボン下、ズボンの者が多くみられる。一方、女子は、肌着シャツにブラウス、セーター類が多い。下半身にはパンツ類やズボン下を複数枚着用し、その上にズボンまたはスカートを身につけ、その比率は約3:2でズボンが多い。靴下類では男子はソックスを、女子もソックスや膝下ストッキングなど股上のないものを好むようである。

衣服の形や構造には特徴だった点はあまり見受けられないが、素材では化繊のものが多く着用されている。これらの結果をもとに女子の熱抵抗（クロール値）と衣服重量を推定し若年女子と比較したところその値は約2倍あり、厚着の傾向がみられる。

就寝様式については、和室で布団利用者が多く80%をこえるが、男女別比率は10:9である。これはベッドの利用者が女子にやや多いことを示し、起居動作がやや不自由と答えた比率が女子に多いことと一致する。